



Title	GLOCOLブックレット06 結びにかえて
Author(s)	宮原, 曜
Citation	GLOCOLブックレット. 2011, 6, p. 90-91
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48367">https://hdl.handle.net/11094/48367</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 結びにかえて

**宮原 曜** 大阪大学グローバルコラボレーションセンター

「もう一つの日本語」の向こう側には、さらに三つのものがある。ここでは、そのことに触れて本書の結びにかえたい。

第1に「心」の問題である。本書では、以心伝心を否定せざるを得なかったわけだが、それによって見えてくるものもあるもの、いまだ迷いがあるのも確かである。言うまでもなく、世界は言葉だけでできているわけではないが、本書での筆者たちの主張は、さしあたり「言葉」と「心」を区別し、「心」の問題はひとまず棚上げしたうえで、「言葉」によって多文化共生社会でのコミュニケーションのチャンネルを確保し、しかるのちに「言葉」と「心」の統合を図るというものであった。「言葉」に置き去りにされた「心」がさまよってしまいはしないか、懸念されるのである。

第2に、これはどちらかというとポジティブな面であるが、本書が提唱する「もう一つの日本語」の発想は、教育現場や医療現場での「日本語」を変える力を持っている。大学における筆者自身の講義を振り返ってみても、学校での教育は、言語化されないルールに沿って行われることがすこぶる多い。それを言語化することで救われる日本語を母語とする学生は、随分いることだろう。

第3に、「もう一つの日本語」としての「やさしい日本語」の対岸には、「やさしい英語」や「やさしいタイ語」といった「やさしい外国語」があることも忘れてはならない。「相手にわかるように伝え」、「相手の話をできるだけわからうとする」のはどこも同じであろう。私たちが「やさしい日本語」に留まることなく、「やさしいタガログ語」「やさしい台湾語」へと向かうならば、あるいは「やさしいアラビア語」「やさしいイディッシュ語」「やさしいベンガル語」を話す人とどこかで出会うならば、もしかするとほんとうに世界は変わるかもしれない。

感謝の気持ちは、今後の展望とともにある。多言語共生社会

演習の学外実習を快く受入、ご協力をいただいた小学校、中学校の校長先生、教員の皆さん、そしてお話を聞くことのできた生徒の皆さんには、名前をあげることはでいきなもの、感謝してもしきれない。また、「外国人にとっての日本の病院」に関する聞き取りにおいて、ご協力いただいた医療通訳研究会の村松紀子氏と、これも名前をあげることは控えたいが、お二人の発言者の方にも、感謝申し上げたい。

先生方や生徒、発言者の方のお話からも伺えるように、教育や医療の現場でのコミュニケーション不全は、関係者の献身的な努力によって日々よくなっているのとは別次元の、いわば構造的な問題を抱え続けているように思えてならない。そうした問題のいくつかは、本書を通して明らかになっている。多言語共生社会演習に参加した学生(これから参加しようとしている学生)に望まれていることは、各自がそれぞれの専門を生かしながら、問題の解決に向けて、様々な困難な対話を続けていくことにある。